フィールディングとホガース

飯沼　馨

1

小説家のフィールディング Fielding がヘンデル Handel の音楽を愛し、俳優ギャリック Garrick の天才を称揚し、画家のホガース Hogarth に深い尊敬を抱きつづけたことは、この小説家が他の芸術領域にも深い関心とすぐれた理解力を有していたことをおのずと物語つている。私はここでフィールディングとホガースの関係を跡づけてみようと思うのだが、フィールディングは一七〇七年に生れ、一七五四年に四七歳と数カ月で死んだ。ホーガスは一六九七年に生れ一七六四年にこの世を去つた。それだからホガースの方が大体二〇歳年上で、しかも十年も永生きをしたことになる。しかし、二人の間にこのような年齢的な開きがあり、またそれぞれ異つた芸術領域に属していたにもかかわらず、二人は互に温い友情を抱きあい、常に尊敬しあつていた。十八世紀の文人のうちでフィールディングほどホガースの芸術家としての本質と長所を正しく把握し、その才能を高く評価し、生涯を通じて終始一貫この偉大な画家に讃辞を呈しつづけた者はないと云えよう。

なるほどスウィフト Swift は、彼の教会の利益を攻撃したアイルランド議会を嘲罵せる諷刺詩「リージョン・クラブ」*The Legion Club*, 1736 のなかで、彼よりも二〇歳年下であつたホガースのすぐれた諷刺的才能を讃えた。スター

ン Sterne の「トリストラム・シャンディ」*Tristran Shandy*, 1759–67 の第二巻、第四巻の口絵を考案したのはホガースであつたが、スターンはホガースの美学的著作「美の分析」*The Analysis of Beauty*, 1753 を、いかにも彼らしく、賞讃したり、揶揄したりした。[1] しかし彼らの讃辞はフィールディングのそれに遠く及ばない。またホガースはジョンスン・サークルの外郭的存在として認められており、[2] ジョンスン Johnson、リチャードスン Richardson、ゴウルドスミス Goldsmith たちと親交があつたから、[3] 人々は彼らの口からホーガスに対する絶大な賞讃の言葉を期待するかも知れないが、私の知る限りでは、そのような人々は失望するだろう。

このように十八世紀文人のうちで一きわ目だつてフィールディングがホガースの画風に共感と尊敬を抱き、機会あるごとに彼の天稟を称揚しつづけたことは、両者の間に存在した友情の深さ、フィールディングのホガースの画に対する理解力の鋭さを示しているが、このことは両者の人間性や芸術的手法の間に一種の共通点が存在するためだと考えることによつて理解できるだろう。

F・H・ダドンは、フィールディングがリチャードスンよりもはるかに鮮明且つ大規模に当時の社会を写したとし、「十八世紀の英国社会の驚くべき再現」を彼の小説の特徴の一つと考えているが、「その効果を達成するための諸手段を用いる際に、フィールディングは厳密な節約を行つた」と述べ、彼が原則として、人物、物質的環境、背景、風景、装飾などの詳細な描写をさけたことを強調して、フィールディングは「すべての冗漫な描写を厳しく制限して、目に見えるような、暗示的なタッチによつて、彼の読者たちに——ともかくも、自分たちの想像力を合理的に働かせることによつて、進んで彼に協力しようとしている人々に——彼の時代の外界の非常に明確な生き生きとした印象を首尾よく伝えることができた」と云つている。[4] そしてこの点にダドンは彼とホガースとの著しい相違点を見、両者を対比して次のように述べている。

「同時代の社会のリアリスティックな描写において、我々はホガースの画とフィールディングの著作との相違をし

みじみと感じる。ホガースは観覧者の方で想像力を働かせることを要求しない。彼は画のなかにすべての些事を、極めてこまかい些事をも描き入れる。彼は完全無欠な場面を示す。他方フィールディングは、読者が推測したり満たしたりする余地を充分に残しておく。彼は暗示するが展示しない。しかも彼の天才の力は非常に偉大なので、彼が我々に紹介する世界は、ホガースの世界に劣らぬ真実さと明析さを有している。[5]」

たしかにこの言葉は両者の相違点の一つを鮮やかに指摘しているが、これはホガースの方が細部においてよりリアリスティックであつたということであり、この相違は両者の本質的な差異というよりも、リアリズムの限界内における小説と絵画というジャンルの持つ避けがたい相違にも関連しているように見える。これをもつてフィールディングとホーガスは本質的に異質的な芸術家であつたとはいえぬし、勿論ダドン教授もそのような見解に組するとは思えない。

また教授は、フィールディングのリアリズムについて語りながら、「彼の目的は、彼がかくも勤勉に観察し研究した現実の人間社会の全く嘘偽りのない絵図を示すこと」であつたとし、彼はかくあるべきだとか、こうあつてほしいとか自分が願うような社会を描かず、あるがままの社会を描こうとし、「彼の努力は人性をできる限り厳密且つ鋭く再現すること」であり、彼はまた「自然」が供給した材料をみだりに改変せず、自分が見たものをすつかり正直且つ率直に描き、「自分の絵図から楽しいもの、美しいものをはぶいたりしなかつた」と述べ、ホガースにはともすればその傾向があつたことを暗示している。[6] しかしこれも強いて云うなら程度の差であつて、ホガースの諷刺的な風俗画ばかりを対象とせず、彼の「えび売り娘」 *The Shrimp Girl* をはじめとする様々の肖像画や一家だんらん図を考えの中に入れた場合には、人々はこの言葉をそう簡単に受け入れようとしないかも知れない。私にはこの言葉もホガースとフィールディングの本質的差異を論じている言葉ではないように思われる。むしろこれらの言葉はそのままホガースにもしつくり当てはまるだろう。

多くの人々はフィールディングとホガースの類似性を強調している。クロス教授は、右の点に関しては、「彼(フィールディング)は自分が人性の非英雄的な側面を強調したことを率直に認めたであろうが、自分の均衡の欠如は、スウィフトよりも、さらにホガースよりも、ずつと顕著ではないと云つただろう」と主張しているが、しかし、一方、ギャリック、ホガース、フィールディングが夫々演劇、絵画、小説の領域で同じことを目ざしていたことを認め、「ホガースの芸術はフィールディングの芸術と多くの共通点を有していた」とし、「フィールディングの誇張に走ろうとする傾向は彼の友人ホガースの実例によつて阻止された。その実例は、彼に、姉妹芸術においてはどうすれば性格と出来事が効果を生むように強められ、しかも戯画になることを免れうるかを示したのであつた」、とホガースのフィールディングに対する影響さえ認めている。[7]

また一方オウスティン・ドブスンは、「トム・ジョウンズ」について語りながら、これに対等するものはデフォウ Defoe の作品でもリチャードスンの作品でもなく、むしろ「フィールディングの友人であつたあの偉大な絵画による諷刺家の傑作」であるとし、両者を対比して次のように述べている。

「フィールディングとホガースには同じ構成力、同じ厳密な因果関係、同じ些事の意味深長さ、同じ引喩の側光がある。両者とも衒いと偽善に対する同じ憎悪——同じ誤りなき性格の洞察——を有している。両者とも顕著な対照と喜劇的情勢に等しく心ひかれ、両者には、表現の同じ逞しい力強さと結ばれた、同じ目的ある、はつきり宣言された道徳がある。なるほど一方はどちらかと云えば悲劇に傾き、他は喜劇に傾いているが、もしフィールディングが絵を描けば、それは『当世風の結婚』の様式であつただろうし、もしホガースが小説を書いたら、それは『トム・ジョウンズ』の様式であつただろう。[8]」

以上引用した言葉は二人の芸術家のもつ共通点を簡潔に捉えているといえよう。勿論、両者の間にこまかい種々の相違点が存在したことは事実であるにしても、二人は本質的には同じ傾向の芸術家であつたし、その芸術的地位にお

いても手法においても、その他性格の面においても極めて相似した特徴を有していた。

フィールディングは劇作家、ジャーナリストから物語作家に転じ、叙事詩に学びながら、当時勃興しつつあつた中産階級の物語ジャンルであるノヴェルの創始者の一人となり、しばしば「英国小説の父」と呼ばれている。ホガースは銀細工師の徒弟から版画家となりそれから油絵画家に転じた。彼の用いたジャンルは当時の社会を描いた諷刺的な風俗画（picture'd morals）、一家だんらん図（conversation pieces）、肖像画、歴史画で、十八世紀に彼が名声を得たのは風俗画の版画によつてであつたにしても、彼の油絵画家としての真価は近代の批評家によつて確認されるに至つており、彼は英国絵画史におけるユニークな存在であるばかりか、英国の生んだ最初の偉大な国民画家として「英国絵画の父」なる名を附されている。特に彼の真骨頂とも云うべき物語風の続きものの風俗画について云えば、絵で物語を語つたり、同時代の社会情景を描いたりすることは決して新しいことではなかつたが、両者を綜合し、当時の社会風俗を一つのリアリスティックな興味深い物語に仕組んで、これを絵画的な高さをもつて表現したのはホガースをもつて嚆矢とすると云えよう。この意味で彼もまた一つの新しいジャンルの創始者であつた。また彼は真の意味で民衆画家であつたばかりか、その画を版画に彫つて宏く人々の手に贈りとどけ絵画を民衆のものにした。

二人は人物描写などの点で共通なものをもつていたばかりでなく、ホガースとフィールディングは本質的にリアリストであり、彼らは先人を模倣せず、直接「自然」から学んだ。フィールディングは「ジョウゼフ・アンドルーズ」の「序文」や「トム・ジョウンズ」の前置きの章で模倣を排して直接「自然を写す」ことを力説した。ホガースも、模写は「水を一つの容器から別の容器へ注ぐようなものだ」と述べ、「他人の作品の模倣者となることよりももつと高い地位を目ざすならば、すべての人は自然を研究すべきである」と主張し、「自然の法則を厳格に墨守し、自然の種々様々な様相を綿密に注意する人々は、真理を踏みはずして偏見に走るようなことはない」と強調した。[9] ダドン教授は「写実」'Truth to Nature' はフィールディングの標語であつたと云つたが、[10] これはまた終始一貫ホガースの精

神でもあつた。ホガースが「美の分析」のなかで「へび状のうねつた線」を美の基本的な線だと大胆に主張したのも彼の自然の観察の所産に他ならなかつた。

彼らはこのようにリアリストであつたばかりでなく、同時に諷刺家、諧謔家であり、当時の社会をペンと絵筆の達しうる限りのリアリズムをもつて如実に描き出すと同時に、人々の愚劣さ、弱さ、醜さを揶揄嘲笑し、社会の欠陥を鋭くえぐり出して見せた。そしてこのように彼らの生きた社会を痛烈に批判することによつて少しでもよき社会とよき生活を招致しようとする意欲に燃えていた。この意味で彼らはすぐれたモラリストであつた。たしかに彼らの諷刺は人間に対する深い愛情から発していた。

フィールディングは貴族の血統を引き、ホガースはあまり成功したとも云えない学校経営者の息子であつたが、彼らの同情と愛情は常に真面目な生活を送る健全な中産階級以下の人間に向けられており、弱いもの、虐げられたものに対して——人間ばかりでなく動物に対しても——同情的であつた。

彼らはまた、国全体が上昇期にある時代の芸術家に特有な、自国に対する深い信頼と誇りを有していた。更にもつとせんさく好きな人は彼らの体質や性格の面においても類似性を指摘するかも知れない。彼らの性格はその作品におのずと現われているが、フィールディングは生来豪放、肉体的にも精神的にも男らしく、若い頃には放埒であつたと云われるが、誠実であり正直であり情深かつた。ホガースは小柄ではあつたが逞しい体軀と知的で精悍な風貌を有し、偏見が強く阿諛に弱く、頑固で喧嘩好きだつたが、一方においては、率直、正直であり、友人としては思いやりがあり機智に富み、愛する人々に対しては忠実で寛大であつた。若い初恋に悩むフィールディングがライム・リージス Lyme Regis の佳人セアラ・アンドルー嬢 Sarah Andrew を、同意の上ではあつたが、力づくで引さらおうとすれば、ホガースは師匠に当る肖像画家ソーンヒル Thornhill の美しい一人娘ジェイン Jane と駈落ちしたりした。

いずれにしても、両者の間に横たわる人間的あるいは芸術的な親近性が二人の温い友情をはぐくみ、またフィールディングをしてホガースに対する生涯やむことのない讃辞を呈させたのであろう。先にダドン教授がフィールディングは描写の際に「厳密な節約」を行つたと主張していることを記したが、後で述べるように、フィールディングはしばしば自分の小説に登場する人物を読者の前にほうふつたらしめようとする際に、ホガースの画中の人物を引合いに出し、自分の人物をホガースの描いた人物から読者に類推させることによつて描写の「節約」を行つてもいるのである。この事実はホガースの版画が一般の人々に熟知されていた証査であると同時に、二人の間の手法上の相似性をフィールディング自身が深く意識していたことを意味する。このような才能の共通の地盤が二人の間に親しみにあふれた理解と尊敬を生んだに相違ない。

2

一七三一年三月にフィールディングは前年上演の「トム・サム、一つの悲劇」*Tom Thum. A Tragedy* を改作した「悲劇のなかの悲劇、または、偉大なるトム・サムの生涯と死」*The Tragedy fo Tragedies; or, The Life and Death of Tom Thum the Great* を舞台にかけた。これは当時まだ流行していたドライデン流の「英雄悲劇」を揶揄したバーレスクであるが、この悲劇の書物はホガースが考案しファンデァグフト Vandergucht の彫つた口絵で飾られた。口絵に選ばれた場面は、好色な王女ハンカマンカ Huncamunca が、恋仇の醜いグラムダルカ Glumdalca に近づいて、自分の美貌をトム・サムに誇示せんがために、グラムダルカの醜い顔をろうそくの火で照して見せる場面であつて、これは云うまでもなくドライデン Dryden の「すべて恋のため」All for Love のなかで、オクテイヴィア Octavia が、アントニイ Antony を破滅させたクレオパトラ Cleopatra の美貌を点検するためにクレオパトラに近づくところのもじりである。我々の知る限りでは、この偉大な小説家と才能豊かなこの画家とはこうして結ばれ、そしてこれが二人の

間の長い友情の機縁となつた。

ところでこの一七三一年といえば二人の生涯のどのような時期に当るであろうか。この時までの二人の足どりを簡単にスケッチしてみよう。フィールディングについて云えば、彼は一七二四年二五年頃にイートン Eton を去つてから、二五年の秋頃に上述のアンドルー嬢との事件を起したのち、二八年二月に最初の芝居「恋の種々相」*Love in Several Masques* を書き、この芝居が相当な成功を収めたにかかわらずオランダに赴いてライデン大学 The University of Leyden に入学した。そしてやがて英国に戻ると二九年の秋にロンドンに居を定め、これより彼の劇作家としての生涯が始まり、彼のウォルポール Walpole への諷刺が導火線となつて三七年に演劇取締法案が成立するまでこの生活がつづくのであるから、一七三一年と云えば、彼が劇壇に足を踏み入れたばかりの時期に当る。一方、ホガースは、銀細工師エリス・ギャムブル Ellis Gamble の徒弟を振出しに一七二〇年頃に版画家となり、二六年に彼の彫つた「ヒューディブラス」*Hudibras* の挿絵で人々に認められるようになつたが、二八年頃には油絵に興味を示し始め、小規模な一家だんらん図などを描きはじめた。肖像家ジョン・ソーンヒルの画塾に通つたのもこの頃で、上述のように彼がジェインと駈落ちして秘かに結婚したのは二九年三月のことであつた。彼が名声を得た六枚つづきの風俗画「娼婦一代記」*The Harlot's progress* が版画になつたのは一七三二年のはじめ頃であるが、この原画は結婚後まもなく着手され、描き終えられたのは最後の画の櫃の上に記された日附、三一年九月二日と考えられているから、ホガースがフィールディングのために口絵を考案した時期は、彼がこの大作を手がけていた頃ということになる。ホガースは油絵に手に染めてからも書物の口絵などを彫る仕事を会然やめたわけではなかつたから、ここにフィールディングと結ばれる最初の機会が生まれたのであろう。ソーンヒルは娘との駈落ちを怒つて最初ホガースを許さなかつたが、やがて彼の才能を認めて一七三一年の終りか、一七三二年のはじめに両者の間に和解が成立したと云われているが、ドブスンによれば、[11] この和解の情景を描いたホガースの画が発見され、その画には当事者たちの他にフィールディングの姿も

描かれている由である。この絵がホガースの筆になるものか否かは別としても、このことはフィールディングとホガースの間に親しい友情が結ばれていたことを裏書きする一つの証拠となるだろう。

この最初の結びつき以後、フィールディングは機会あるごとにホガースを讃えることを忘れなかつたが、その後における二人の関係にふれる前に、彼らが夫々の領域で言及したり諷刺したりした、当時の実在の人物や風俗をさぐつてみよう。これも両者の近似性を考察するうえに何かの参考になるかもしない。

(1) 当時ジョン・ジェイムズ・ハイデッガー John James Heidegger なるスウィス人が、イタリア・オペラの上演されぬ夜に、ヘイマーケットのオペラ・ハウスで仮装舞踏会を催し、これが上流社会で人気のある娯楽の一つとなつていた。フィールディングが「逸楽の祭司長」と呼んだこのハイデッガーは、かかる方面における才能と、その機智に富むことによつて、彼の「ロンドン随一」いや「英国随一」と云われる醜怪な容貌によつて有名だつた。フィールディングは初期の芝居や、「トム・ジョウンズ」、「アミリア」などの小説、あるいはその他の書きものの中でも、ハイデッガーや、この、「心を剝き出しにせんがために顔に仮面をつける」娯楽のことにふれ、これを退屈で愚劣なものと見なして常に非難していた。彼が一七二八年年一月に出したスウィフト流の諷刺詩「仮装舞踏会」*The Masquerade Large Masquerade Ticket*, 1727 と呼ばれる版画のなかでその情景を諷刺的に描き、さらに「激怒せるハイデッガー」Heidegger in a Rage という滑稽なスケッチで、悪戯されて憤激しているハイデッガーの怪奇な風貌を巧みに描いている。[12]

(2) フィールディングが芝居を書いていた頃、イタリア・オペラ、陽気なファース、バラッド・オペラ、パントマイムなどが一般の人気を得て、正式の喜劇悲劇が顧りみられなかつた。フィールディングの喜劇「法学院の伊達男」*The Temple Beau*, 1730 につけられたジェイムズ・ラルフ James Ralph のプロローグはその傾向を嘆いているが、こ

れはモリエール風の喜劇を志向していたフィールディング自身の気持でもあつたにちがいない。ホガースも「英国劇壇瞥見」*A just view of the British Stage*, 1725 で、ドゥルアリ・レイン劇場の支配人たち、ブース Booth、ウィルクス Wilks、シベ Cibber の三人がパントマイムをかける相談をしている所を扱い、この風潮を諷刺している。

(3) ポウプ Pope が「愚物列伝」*The Dunciad* で槍玉にあげたように、フィールディングは「作者のファース及び町の快楽」*The Author's Farce; and the pleasures of the Town*, 1730（一七三四年に改作）で、非国教派の奇矯な説教師、「雄弁家」ジョン・ヘンリー John Henley の風変りな馬鹿げた説教ぶりを諷せば、ホガースも、だらしのない酒宴の情景を描いた「現代風深夜の懇談」*A midnight Modern Conversation*, 1733 や、彼が子供に洗礼を授けているところを描いた「雄弁家ヘンリー」*Orator Henley*, 1745 などの版画で彼を描きとつた。

(4) フィールディングは当時の社会風俗を批判的に描いた五幕物の喜劇「今様亭主」*The Modern Husband*, 1732 のなかで、上流婦人の間に流行していた賭トランプと、それにまつわる愚劣な悲喜劇を描いて人々に警告を発したが、ホガースもまた「淑女の最後の賭」*The Lady's last stake; or Picquet; or Virtue in danger* のなかで、ある若い貞淑な既婚婦人が士官と賭トランプをやつて将に貞操をも失いかけているさまを描いてみせた。

(5) アンブローズ・フィリップ Ambrose Philip の悲劇「悲しめる母」*The Distrest Mother* を改作したフィールディングの二幕物のバーレスク、「コヴェント・ガーデン悲劇」*The Covent-Garden Tragedy*, 1732 のなかのパンチボウルおばさん Mother Punchbowl のモデルは、当時の有名な淫売宿の女主人で後に曝台に立たされたエリザベス・ニーダム Elizabeth Needham だと云われている。また、門番のレザーサイズ Leathersides は、ドゥルアリ・レインの「バラ亭」The Rose Tavern の門番、乱暴者のレザーコート Leathercoat をモデルにしたものと考えられている。ホガースもニーダムを「娼婦一代記」の第一図に、レザーコートを「放蕩者一代記」の第三図に登場させている。前者のなかで、ロンドンに出て来たばかりのメアリ・ハックアバウト Mary Hackabout に近づいて話しかけている絹の洋服を着た中年

の女がニーダムで、後者の画で白鑞の皿を持つている男がレザーコートである。

(6) 英国に招かれた有名なイタリア人の男性ソプラノ歌手ファリネルリ Farinelli は容姿共に不細工であつたが、正直なやさしい男で、その美しい声のために上流階級の、特に女性たちの圧倒的な人気を得ていた。フィールディングは「一七三六年紀要」*The Historical Register for the year 1736*, 1737 で、この柔弱なオペラ・スターに対する英国婦人の情熱を揶揄したが、外国の芸術家に反感を抱いていたホガースも「放蕩者一代記」の第二図で彼に対する上級階級の熱狂ぶりを諷し、さらに、「当世風の結婚」*Marriage à la Mode*, 1745 第四図の豪奢な装いをこらしている豚のような顔をしたぶざまな姿の歌手は彼を描いたものとも云われている。[13]

(7) 「忠実な英国教会の擁護者」であつたフィールディングは当時の風潮通りメソディズムに好感を有しておらず、「メソディズムを偽善と結びつけていた」が、[14] ホガースのメソディズムに対する嘲笑も、彼の「狂信図解」*Enthusiasm Delineated* 及びその改作とも云うべき、「軽信、迷信および狂信」*Credulity, Superstition, and Fanaticism, : A medley*, 1762 なる版画に示されている。

(8) フィールディングは一七四〇年一月二十九日の「チャムピオン」紙で、若人が世間的出世に必要な厚顔さを身につけるためにはどうしたらよいかを論じ、その方法の一つとしてジェイムズ・フィグ James Figg の道場通いをすすめている。ジェイムズ・フィグは一七三四年に死んだが、剣術、棒術、拳闘の道場を開いていて、それらの術に長じているので有名だつた。ホガースの方は彼の肖像などを描いているばかりでなく、「放蕩者一代記」第二図にも彼を登場させているが、その意図は勿論フィールディング同様、当時の上流階級の子弟がフィグについて武術を習うことを見栄としているのを諷したものであつた。

(9) 同じ「チャムピオン」紙(同年三月二十二日号)でフィールディングは犬や猫、特に馬に対する人々の残酷な扱いや仕打ちに抗議したが、ホガースも「残酷の四段階」*The Four Stages of Cruelty*, 1751 で動物を虐待する連中に恐しい

警告を発している。

(10) フィールディングは「最近強盗などの増加せる原因の考察」*An Enquiry into the Causes of the late Increase of Robbers, etc., with some Proposals for Remedying this Growing Evil,* 1751 なるパンフレットの中で、かかる社会悪をもたらした原因の一つとして、当時下層階級の間に広まつていたジンを飲む悪習を指摘し、その害毒の大いさを愁いたが、ホガースもかの有名な「ジン小路」*Gin Lane,* 1751 でジンを飲む弊害の恐しさを如実に描き出している。

(11) フィールディングもホガースも当時のいんちき医師をしばしば紹介しているが、そのなかにウォード Joshua Ward とミソバン John Misaubin がいる。ウォードは左頬に赤紫のあざがあつたところから「スポット」ウォードと呼ばれたが、その丸薬と水薬は非常に効能があると評判され、ジョージ王をはじめ多くの名士の愛顧を得て、この万能薬で財を作つた。彼のことを悪く云う人もあつたが、フィールディングは、「トム・ジョウンズ」(第八巻第九章)、「アミリア」(第八巻第九章)でこの丸薬のことにふれ、特に「トム・ジョウンズ」ではその卓効いちぢるしいことに言及している。しかしその彼も一七五四年に水腫で悩んだときこのウォードにかかつたが、多くの人々の病気をなおしたその薬も自分にはこれという効目はなかつたことを認めざるを得なかつた(「リスボン渡航記」序文)。

ミソバンは一七三四年に死んだが、フィールディングはモリエールの「心ならずも医者にされ」の翻案である「偽医者」*The Mock Doctor,* 1732 のなかでこのフランス人の医者を揶揄したばかりでなく、「トム・ジョウンズ」(第十三巻第二章)でも彼を皮肉つている。

一方、ホガースはウォードを、「葬儀屋の一団、または、医者の相談」*The Company of undertakers or the Consultation of physicians,* 1736 のなかで、テイラー Taylor やマッブ夫人 Mrs. Mapp とならべ、このトリオによつていんちき医者を代表させた。また彼が「当世風の結婚」第三図を描いたときミソバンの家庭を念頭に置いていたことは殆ど確実であると思われるし、更に「娼婦一代記」第五図の死の場面では、ウォードとミソバンが互に罪のなすり合いをして

云い争っているところを描いている。

⑫ その他、フィールディングは「英国におけるドン・キホーテ」*Don Quixote in England*, 1734 などで当時の選挙風景を諷しているが、ホガースも四枚からなる「選挙」*An Election*, 1755-8 という同じ傾向の諷刺的な風俗画を描いた。

3

さて、前述のようにホガースは「娼婦一代記」を手がけていた頃に、「トム・サム」の口絵を考案したのを機縁にフィールディングと結ばれ、「娼婦一代記」を完成後ひきつづき「放蕩者一代記」に着手した。そして一七三二年のはじめに「娼婦一代記」の版画を出し、その翌年の十二月には「放蕩者一代記」の版画を彫りにかかり、三五年六月のはじめにこの版画ができ上つて、ホガースの名声は確立した。そしてこれに引き続いてホガースは、フィールディングが後に言及するいくつかの版画、例えば「貧窮の詩人」*The Distressed Poet*, 1736, 四枚からなる「一日の四刻」*The Four Times of the Day*, 1738,「激怒せる音楽家」*The Enraged Musician*, 1741 を出した。また三六年三月に彼はフィールディングの「落首」*Pasquin* の慈善興業の切符を彫つたと云われるが、これは確定的ではないようである。

一方、フィールディングは三七年の演劇取締法案成立後、三〇歳にして法学院に入学し、四〇年六月に弁護士となつたが、その間、三九年十一月から四一年六月まで「チャムピオン」紙 *The Champion, or British Mercury* の編輯者となつていた。彼のホガースに対する讃辞はまずこの「チャムピオン」紙にあらわれる。

四〇年六月十日号でフィールディングは、悪しき実例を示すことが人を教化するのに一番役立つことを主張し、ホガースの前記二つの「一代記」を引合いに出して、次のように述べている。

「私は巧妙なるホガース氏を古今を通じて最も有用な諷刺家の一人と考える。彼のすぐれた作品のうちに諸君は欺

瞞的な場面が諧謔の力をもつて暴露されるのを見る。そして諸君が別の画に目を転ずれば、恐しい宿命的な結果を見る。彼が「放蕩者一代記」及び「娼婦一代記」と呼ぶ二つの作品は、今までに書かれた道徳に関する大部などの書物よりも、徳行と人類維持に役立つように目論まれていると私は敢えて断言したい。真面目な家庭には、『人間の務め』(当時広く読まれていた一六五八年出版の宗教書)と共にこれらの作品を具え置くべきである」

ここでフィールディングはホガースのモラリストとしての側面を讃えているのであるが、四一年一月に出版した「ヴァーノン頌」*The Vernoniad*——提督ヴァーノンを讃え同時にウォルポールを諷したヒロイック・カプレットの詩——で彼はホガースの「貧窮の詩人」に言及し、ホガースを「自然の最も正確な模倣者」と称讃した。[15] このような、リアリスト・ホガースの描写力に対する讃辞は、フィールディングが一七四二年に出版した「ジョウゼフ・アンドルーズ」の「序文」でもくり返されている。「序文」のなかで彼はホガースについて、次のように云つている。

「巧妙なるホガースを道化(バーレスク)画家と呼ぶ人は、私に云わせれば、彼に大して敬意を表することにはならない。というのは、人間を描くのに鼻やその他の顔の造作を途方もない大きさに描いたり、その人間が何か馬鹿々々しい奇怪な姿勢を取つたところを描いたりすることは、画布の上に人々の感情を表現するよりも確かにたやすいことであり、賞讃するほどのことではない。描かれた人物が呼吸しているようだと云うのは、画家に対する非常な讃辞と思われているが、人物たちが思考するように見えるという方が、明らかに、はるかに立派な称讃の言葉である」

これらの言葉は、ホガースを道化(バーレスク)画家と呼ぶのは相応しくないこと、ホガースの描く人物は「呼吸している」ばかりか「思考しているように見える」ことが暗示されているにすぎないと思われるかもしれない。勿論これはホガースに対する正しい評価であり同時に非常な讃辞ではあるが、この序文を通読した者は、引用した言葉の前後関係から、フィールディングがもつと多くのことを主張しているのに気づくだろう。フィールディングは「ジョウゼフ・アンドルーズ」を「まじめなロマンス」と区別して「散文による喜劇的叙事詩」であると主張し、さらにこの小説は「自然

の正しい模倣」である「喜劇」であつて、「奇怪なもの、不自然なものの陳列」である「バーレスク」ではないことを強調し、この区分を絵画の場合を例にとつて説明した。右の引用はその個所に当つているのである。フィールディングはここで自分とホガースは同じ関係にあること、即ち、ホガースは、「人間ではなく怪物を示す」ことを「目的」とし、あらゆる「気儘」が許され、「歪曲と誇張」をこととする「戯画」作家ではなく、「自然のもつとも正確な模写」を生命とする「喜劇的歴史画家」であると主張しているのである。云わばフィールディングは、自分もホガースも喜劇的傾向を有してはいるが、本質的には正統的なリアリストであること、自分もホガースも領域を異にはするが同じ傾向と同じ目的を有していることを強調しているのである。さきに引用したフィールディングのホガースに対する讃辞を読む場合に、このことを忘れては、彼のホガースについての理解の鋭さは半減しよう。ホガースはしばしば戯画作者のように考えられているが、ホガースの真価は、ゴーントも主張しているように[18]、彼がカリカチュアを描かず、夫々の性格をかすかに誇張した現実的な人間を創造し、当時の現実を諷刺と諧謔をたたえて深く広く再現したところにある。これはまたフィールディングの行つたことでもあり、このようなホガースの本質に対する鋭い洞察と、自己との親近感あるが故に、フィールディングは生涯を通じて惜しみなくこの画家に讃辞を呈しつづけたのである。

ホガースの方でもこの賞讃の言葉を心よく受け入れ、この序文に敬意を払つたことは明白である。「当世風の結婚」の予約申込切符である「人物描写とカリカチュア」*Characters and Caricaturas*, 1743 には、「人物描写とカリカチュアの更に詳しい説明は『ジョセフ・アンドルーズ』の『序文』を見られたい」と記されているのだから。

次にフィールディングとホガースの名が重なりあうのは、一七四七年にフィールディングが出した「ジャコバイツ・ジャーナル」紙 *The Jacobite's Journal* においてである。それまでにホガースは、彼の続きものの風俗画中の傑作と云われる「当世風の結婚」1745 を出し、またかの有名な、愛犬トラムプ Trump のいる自画像 *Hogarth with pug Dog*, 1745 を描き、その左隅のパレットに、後に「美の分析」を生むに到つた「美と優雅の線」と称する蛇状のうねつた線

を描き入れていた。フィールディングは四三年に「ジョナサン・ワイルド」*Jonathan Wild* を含む「雑録集」*The Miscellanies* を出版後、その決意通り弁護士の職務に専念していたが、四五年に「若僭王」チャールズ・エドワード Charles Edward がフランスの援助とスコットランド高地地方民の支持をうけてイングランドに侵入するにおよんで、愛国心に燃えるフィールディングは再びペンを握った。彼は二つのパンフレットを書いて英国人の奮起を促し、チャールズ・エドワードの支配が英国国民の自由と宗教と物質的利益に反することを説いたが、更に十一月から翌年六月まで「真の愛国者」*The True Patriot* という新聞を発刊した。チャールズは敗退したからこの新聞の使命は果されたが、ハノーヴァ王家の擁護者で、時の政府を支持するフィールディングは、四七年十二月から翌年の十一月まで「ジャコバイツ・ジャーナル」を出して、反政府的なジャコバイト的感情を一掃しようとした。そしてこの新聞の最初の十二号までは、フィールディングがヒントを与えホガースが描いたと云われる[17]木版画のヘッド・ピースで飾られたのであつた。ここには一人の修道僧の引ばつているロバの上に、格子縞の服を着たスコットランド人の男女が乗つているところが描かれている。男は左手に酒杯を持ち、右手に握つたハイランド・キャップを振つている。女はフランス式の剣を手にしている。ロバはジャコバイト達の固執する頑迷な教義を象徴し、それを修道僧が引つばつているのは、彼らの政策に対するローマ教会の邪悪な影響力を意味する。手綱には反政府機関紙「ロンドン・イーヴニング・ポスト」がぶら下つていて、これをロバがむしやむしや食べているが、これはジャコバイト達が知識を得ている新聞の虚偽と下品さを表わす。ロバの尻尾にはジェイムズ・ハリングトン James Harrington の「オウシアナ共和国」*Commonwealth of Oceana*, 1656 が結びつけられ、それにはフランス王家を象徴するいちはつの紋章が刻まれている。これはジャコバイトに追ずいする空論的共和主義者の酔狂さを諷したものである。ホガースは後にジョン・ウィルクス John Wilkes と仲たがいをするまでは、ウォルポールに対する続きものの諷刺画を描くように要請されてもこれを拒んだほど政争の渦中に捲き込まれるのを避けてきたのであるが、この新聞を彼が自己の木版画で飾つたとすれば、彼

がフィールディングと同じ見解と熱意を有していたかどうかは別問題としても、すくなくとも両者の間にかたい友情が結ばれていたことは確実であろう。

フィールディングは彼が熱愛した妻シャーロット Charlotte を失つてから三年目に当る一七四七年に、忠実な召使メァリ・ダニエル Mary Daniel と再婚し、その後四八年にウェストミンスターの治安判事になり、翌年一月にミドルセックス州の治安判事に任命されたが、二月に出版した「トム・ジョウンズ」でも彼はホガースを讃えつづけた。第十四巻第一章では、模倣を排して直接「自然を写す」ことを力説して、「ヴァンブラとコングリーブは自然を写した。だが彼らを写すものたちは現代と似ても似つかぬものを描くことになる。それは丁度ホガースがティシアンやヴァンダイクと同じ衣裳で社交の会や夜会を描く場合と同じことになる」と述べて、ホガースが当時の社会を如実に描きとつたことを暗に示唆しており、また、第六巻第三章では、ホガースの描いた貧しい詩人――「貧窮の詩人」と題する画中の詩人であろう――に言及したりしているが、我々の興味を引くのは、先に記したように、フィールディングがホガースの描いた人物を読者に思い浮べさすことによつて彼自身の描写を「節約」していることである。

彼は先ずオールワージーの妹ブリジェット嬢を描く場合に「一日の四刻」のうちの「朝」という版画を読者に想起させる。

「私は彼女の肖像を描いてみせたいのだが、もつと有能な大家ホガース氏その人がすでに描いている。彼女は何年か前にホガース氏に肖像を描かせたのであつた。彼女の肖像は最近ホガース氏によつて冬の朝を描いた版画のなかに公開されている。彼女は冬の朝というのにいかにもうつてつけの象徴で、祈禱書を持つたひもじそうな小僕を従えて、コヴェント・ガーデン教会へ歩いて行く（版画のなかで彼女はそうしているのである）のが見られるだろう。」（第一巻第十一章）

またパートリッジ氏の細君を紹介する場合には、「この婦人はあまり人好きのする容姿ではなかつた。彼女がわが

友人ホガースに肖像を描かせたかどうかわからぬが、「娼婦一代記」の第三図で女主人にお茶を注いでいる若い女そつくりだつた」（第二巻第三章）と語つている。

更に家庭教師スワッカム師については、「その先生の顔は、『娼婦一代記』のなかで、監獄で女たちを懲らしめているあの男に非常によく似ていた。」（第三巻第六章）と記している。これによつて読者は、ブリジェット嬢が、淑女ぶつてつんとすまし込んでいる女であり、パートリッジ夫人が肥つた醜女であり、スワッカム師がいかにも残忍そうな顔付の男であつたことを、ホガースの画を想起することによつて知るわけである。

またフィールディングは、ソファイアがブライフィルとの結婚を強いられて家出をした際に、ソファイアの姿が見当らぬと報告する驚愕しきつた召使の姿を描写せんとして、次のような嘆声を洩らしている。

「ああ、シェイクスピア！　われに御身のペンあらば！　ああ、ホガース！　われに御身の鉛筆あらば！」（第十巻第八章）

これは云うまでもなくホガースのリアリスティックな描写力への讃辞であり、ホガースの真にせまる迫力ある描写の手腕は、ここで、フィールディングが常に尊敬していたシェイクスピアとならべられている。[19]

フィールディングのホガースへの讃辞は五一年十二月に出した「アミリア」のなかでも依然として続く。第三巻第三章には、ホガースの肖像画の見事な手腕を暗示する言葉が書き記され、第三巻第十二章では、ハリスン博士 Dr. Harrison の簡素な牧師館には直接生活に必要でないものとしては書物と「ホガースの版画」しか置いてなく、博士がホガースを「風俗諷刺作家」moral satirist と呼んでいたことが語られている。[20] さらに、第一巻第六章では、激しい気性の女マシューズ嬢 Miss Matthews の激怒の激しさを示す際に、彼はホガースを再びシェイクスピアや名女優クライヴ Catherine Clive とならべて引合いに出し、「シェイクスピアも記しえず、ホガースも描きえず、クライブも演じえぬ」ほどであつた、と述べている。

その後フィールディングは一七五二年一月から十二月まで「コヴェント・ガーデン・ジャーナル」*The Covent-Garden Journal* を編輯したが、一月二十一日号ではホガースの「ビール通り」*Beer Street*, 1751 に言及している。そして更に、五四年十月に彼がこの世を去る数ヵ月前、衰弱したからだを癒やすためにリスボンに赴いた際、その六月二十七日附の日記のなかで「激怒せる音楽家」の版画にふれて、「見る人をつんぼにするに充分である」と評している。この短い評言もホガースの描写力に対する讃辞であり、画面にみなぎる音なき騒音を鋭く感じとつた言葉と云えよう。

4

このようにフィールディングは、「自分よりももつと有能な大家」「巧妙なる」友人ホガースの、諷刺家としての側面やそのリアリズムや彼の真に迫つた描写力を、永久に書くことをやめる殆どその瞬間までたえず称讃しつづけた。これに対してホガースの方でも機会あるごとにその敬意と友情を示しつづけて来たが、フィールディングの才能を尊敬し彼を愛する人々は、ホガースが最後に示したこの偉大な小説家への友情を忘れることはできないだろう。私の云うのは勿論ホガースの描いたフィールディングの肖像画のことである。一寸信じられないことだが、フィールディングはあれほど名声をえたにもかかわらず彼の肖像画は生前に描かれたことがなく、現在伝わつているフィールディングの肖像はいずれもホガースの描いたあのペン画のスケッチに基づいている。それ故に我々はホガースに対していくら感謝しても感謝しすぎるということはない。フィールディングは生前ホガースに肖像を描いて貰う約束をしながら遂にそれを果さずにいたが、彼の死後八年のちの一七六二年に、アーサー・マーフィー Arthur Murphy がフィールディングの選集を刊行するに当り、その口絵とするために彼の肖像画をホガースに依頼した。そしてホガースの描いたものをジェイムズ・バザイア James Basire が彫つたのであるが、それは原画を知つている人々から原画そのままと大鼓判を押されたほどのできばえであつた。これについて、ホガース自身このエッチングを自分の描いた画と錯覚し

て、自分の画の方を無用のものと考えて火にくべてしまい、半焦げになつたその画をルイス夫人がつまみ出したという話さえ伝わつている。[21] この版画には、後に、枠と、フィールディングの各方面における功績を示す種々の装飾が入れられたが、この版画に記されているところによれば四八歳（彼の死んだ年）のフィールディングを描いたものである。しかし実際はホガースが記憶をたどつて描いたものであるから、これはホガースが最後に会つた当時のフィールディングの面影を伝えたものであろう。晩年に彼は健康を損ねその容貌は衰えを示していたから、我々はこの画から若い激刺たる彼の容姿を偲ぶことはむずかしい。この画はフィールディングの横顔を描いたものであるが、黒い眼は窪んでいるがいかにも鋭くすべてを見通すようであり、彼の特徴をなす長く巨大なローマ風の鼻は顔の大きな部分を占めて見事に聳え、その下の薄い上唇の曲線はたしかに半ば皮肉な、半ばユーモラスな感じを与えている。「リスボン渡航記」に記されているように彼は歯をなくしていたが、その事実は唇が落ち込んでいる所からも知られる。顎は彼自身が云つているほど異常に長くはない。その頸と肩はあのがつしりとした逞しさをいまだ失つていない。

この画については一、二の興味深いエピソードが伝つている。一つはマーフィーの語つているものである。それによれば、ホガースはフィールディングの容貌をはつきり思い出すことができず、苦心を重ねた末とても駄目だと諦めかけていた時、ある婦人が鋏で切抜いていたフィールディングのシルエットにヒントをえて、ホガースは彼の敬服していたこの作家の肖像を、友情をこめて描き上げることができたというのである。彼にそのシルエットを提供した婦人はリチャードスンの文通者の一人マーガレット・コリア Margaret Collier だといわれる。また、アイァランドによれば、フィールディングが深い敬意を払つていた年少の友人ギャリック Garrick がフィールディングの服を着、メーキャッブをほどこして、ホガースのためにモデルになつたというような話も流布されていたらしい。[22]

アイァランドはこれらの二つのエピソードを「子供だましの取るに足らぬ話」として斥け、「ホガースは彼の友人の死後、彼の作品集の口絵に肖像がいると云われて、記憶からこれをスケッチした」と記している。またジョージ・

スティーヴンズ George Steevens も、ニコルズ J. Nicols と共著の *Biographical Anecdotes of William Mograth* のなかで、ホガースは彼の妻ともう一人の婦人（ルイス夫人）の前でこの肖像画を描き始めそして完成したもので、彼自身の記憶に頼つただけだつた、と述べていると云われる。[24] ドブスンも、ホガースの目の記憶は驚くべきものであつたからマーフィーの話はありそうもないことであり、そのうえ上記のスティーヴンズの説と矛盾するとしてこれを斥けている。[24] 一方、クロスはギャリックがフィールディングに份したという話については、ギャリックがホガースに肖像画を描くようすすめたにすぎぬとし、マーフィーの話に関しては、これは大体本当であろうとしている。そしてこの話は、H・B・ウィートリー Weatley の、「記憶にのみ頼つて描かれた肖像画がプロフィールになるようなことはめつたにありそうにもないし、鼻の強調はシルエットを想い出させる」という見解と合致すると述べている。[25] ダドンも、このマーフィーの話はホガースがまだ生きていた間に公にされ、それをホガースは必ず目にしたにちがいないし、多分大体本当であろうと云つている。[26]

いずれにしても、この画あればこそ我々はこのすぐれた小説家の風貌を偲びうるのだから、ホガースはフィールディングが彼に捧げつづけた深い敬意と友情に対して充分に報いえたと云えるだろう。（これは「ホガース、フィールディング、ギャリック」という小論の最初の部分となる予定である）

註① W. L. Cross, *The Life and Times of Laurence Sterne*, Chap. v. L. P. Curtis, *Letters of Laurence Sterne*, p. 100, n. 3 参照のこと。

② John Bailey and L. F. Powell, *Dr. Johnson and His Circle*, Chap. VI.

③ ここで紹介する余裕はないが、ボズウェルはホガースがリチャードスンの家で初めてジョンスンに会つた際の面白い逸話を伝えている（*Boswell's Life of Johnson* (The Oxford Standard Authors edition, 1953), pp. 106-7）ホガースはジョンスンの「疑い深さ」にはいささか辟易したとみえ、「ジョンスンはとても賢い人だが、ソロモン王というよりダビデ王というところだね。あの人は軽卒にも誰もかれも嘘吐きだと云うからね」と友人に語つたといわれる（Austin Dobson, *W. Hogarth*,

Chap. VI).

④ F. H. Dudden, *Henry Fielding. His Life, Works and Times.* Vol. II, pp. 1094–1095.

⑤ *Ibid.*, Vol II, p. 1095, n. 1.

⑥ *Ibid.*, Vol. II, pp. 1092–1093.

⑦ W. L. Cross, *The History of Henry Fielding,* Vol. III, p. 276, Vol. II, p. 176, Vol. I, p. 359, p. 323.

⑧ Austin Dobson, *Fielding.* Chap. VII.

⑨ John Ireland, *Hogarth illustrated,* Vol. III, Chap. I, p. 8, Chap. II, p. 80, Chap. IV p. 113.

⑩ F. H. Dudden, *op. cit.*, Vol. II, p. 1093.

⑪ Austin Dobson. *William Hogarth,* Chap. III.

⑫ *Large Masquerade Ticket* は Ireland, *op. cit.*, Vol. III に口絵として出ている。*Heidegger in a Rage* については同書 Vol. III, p. 323 にそのスケッチが出ており、彼が激怒するに到つた面白い逸話が語られている。

⑬ この男をアイァランドは単に「イタリア人の歌手」と記しており、ドブスンはこれをアルト歌手ジョヴァンニ・カレスチニ *Giovanni Carestini* としているが、ダドンはファリネルリと考えている。いずれにしてもこの人物がホガースのイタリア・オペラへの反撥を示していることには変りがない。

⑭ ダドンも記している通り（*op. cit.*, Vol. I, p. 270, n. 1.）、「トム・ジョウンズ」を例にとつても、フィールディングは忘恩の徒ジョン・ブライフィル大尉をも、またその息子の偽善者ブライフィルをも共に、メソディズムの信奉者であることをほのめかしている（*Tom Jones,* Bk. I, Chap. 10, XVIII, Chap. XIII）。

⑮ Dudden, *op. cit.*, Vol. I, p. 61, n.

⑯ "The Faber Gallery" のなかの *Hogarth* に附けられている William Gaunt の序文参照のこと。

⑰ Cross, *The History of Henry Fielding.* Vol. II, p. 67.

⑱ Elizabeth Jenkins, *Henry Fielding* によれば、ホガースはメァリの肖像画を描いたことがあり、それはこの質撲な婦人の面影をよく伝えているものであつたが、不幸にも失われてしまつた由である（p. 56）。

⑲ フィールディングが絶えず讃えつづけた作家のなかに、シェイクスピア、スウィフト、ミルトンがいるが、ホガースもこの三人の作家を尊敬していたことは *Hogarth with Pug Dog* のなかにこの三人の書物が描き入れられていることからも知ら

れる。

⑳ クロス、ダドン両教授によれば、この個所は初版においてはホガースに対するもっと大げさな讃辞が書きそえられていたという。即ち、現在我々が目にする書物では、

..... the prints of Mr. Hogarth, whom he [the doctor] calls a moral satirist.

となっているが、初版本では次のように書かれていた。

..... the prints of Mr. Hogarth, whom he calls a moral painter, and says no clergyman should be without all his works, in the knowledge of which he would have him instruct his parishioners, as he himself often doth.

㉑ John Ireland, *Hogarth illustrated,* Vol. III, p. 292, n.

㉒ *Ibid.,* p. 291.

㉓ Dudden, *op. cit.,* Vol. II, p. 1057. Dobson, *Fielding,* Chap. VII.

㉔ Dobson, *Fielding,* Chap. VII.

㉕ Cross, *op. cit.,* Vol. III, pp. 71-72.

㉖ Dudden, *op. cit.,* Vol. II, p. 1056.